

基準 6 教育の成果

(1) 観点ごとの分析

観点 6 - 1 - : 学生が身に付ける学力、資質・能力や養成しようとする人材像等に照らして、その達成状況を検証・評価するための適切な取組が行われているか。

【観点到る状況】

観点 1 - 1 - で述べた教育の成果に関する目標の達成状況を検証・評価する上で注目すべき点は、カリキュラム・フレームワークの構築である(資料 5 - 1 - 1 - C)。その目的は、学校教育教員養成課程において、各授業科目の内容の重複や欠落している点を確認してバランスのよいカリキュラムを編成し、学生自身が受講している科目で何を学ぶのかを理解し、学外の教育関係者等に本学が学生にどのような力を付与するかを知らせることである。その基本的な考え方を示したものが、資料 6 - 1 - 1 - A である。

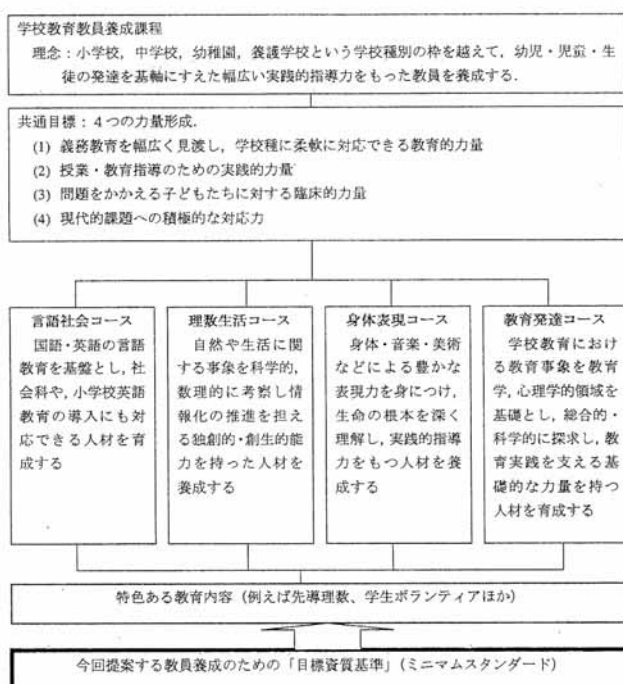
また、資料 6 - 1 - 1 - B に示すように、教育職員免許法に定められている要件と本学のカリキュラム・フレームワークとを相関させて、各授業科目で育成すべき目標資質を明らかにしている。

このようにカリキュラム・フレームワークは、それぞれの授業科目がどのような狙いでどこまで達成するのかを明示したものであり、最終的には卒業時における学生の学力保証につながる。これを契機に大学における授業の在り方や地域の教育機関との連携にも発展する全国的にも注目すべき先進的な取り組みと考えられる。今後は、総合教育課程においても作成する予定である。

また、大学の広報誌『ならやま 2006 年春号』において、「カリキュラム・フレームワーク」の意義や活用法を説明したこと等、学生にも周知徹底を図ろうとしている(別添資料 6 - 1 - 1 - 1)。

資料 6 - 1 - 1 - A カリキュラム・フレームワークの概要

2. カリキュラムフレームワーク(目標資質基準)の位置(提案)



目標資質基準の位置

資料6 - 1 - 1 - B 免許法の規定する枠組みとカリキュラム・フレームワーク（7つの目標資質能力基準）のクロス表

目標資質能力基準 免許法の規定する枠組み	学校教育の課題把握	教科・領域に関する基礎的知識と教育実践への具体化	情報活用能力	授業力	児童・生徒理解と教育実践への具体化	学校と地域社会との連携	職能成長
教職の意義等に関する科目							
教育の基礎理論に関する科目							
教育課程及び指導法に関する科目							
生徒指導、教育相談及び進路指導に関する科目							
総合演習							
教育実習							

・別添資料6 - 1 - 1 - 1 「カリキュラム・フレームワーク」 広報誌『ならやま 2006年春号』より

【分析結果とその根拠理由】

本学では学則等に教育の成果に関する目標を定めており、その達成状況を検証・評価する枠組みとして、学校教育教員養成課程においてカリキュラム・フレームワークを構築している。

今後は、総合教育課程でも整備を進める予定である。

以上のことから、学生が身に付ける学力、資質・能力や養成しようとする人材像等に照らして、その達成状況を検証・評価するための適切で先駆的な取組が行われていると判断できる。

観点6 - 1 - 1 : 各学年や卒業（修了）時等において学生が身に付ける学力や資質・能力について、単位修得、進級、卒業（修了）の状況、資格取得の状況等から、あるいは卒業（学位）論文等の内容・水準から判断して、教育の成果や効果が上がっているか。

【観点到に係る状況】

(1) 教育学部

教育職員免許状の取得状況

教育職員免許状取得者数等を資料6 - 1 - 2 - Aに示す。過去5年間において、卒業生に対する教育職員免許状取得者の割合は増加傾向にある。学校教育教員養成課程の学生は、2校種の一種免許状の取得が卒業要件となっているので、それを差し引いて1人当たりおおむね1件のオプション免許状を取得している（平成20年度卒業生）。

資料 6 - 1 - 2 - A 学部卒業生（9月末卒業生を含む）の教育職員免許状取得者数

	平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度	平成 20 年度
卒業者の数	293	277	269	270	270
免許状取得者数	239	243	252	246	245
卒業生に対する免許状取得者の割合	81.5%	87.7%	93.7%	91.1%	90.7%
一 種	631	659	673	694	655
免許状取得者に対する割合	264%	271%	267%	282%	267%
二 種	9	2	9	4	3
免許状取得者に対する割合	3.8%	0.8%	3.6%	1.6%	1.2%

(単位:人)

(注)平成 20 年度卒業生について、課程別に見た 1 人当たり取得免許状件数は、次のとおり。

$$([1 \text{人あたり取得免許状件数}] = ([\text{一種免許状取得件数}] + [\text{二種免許状取得件数}]) / [\text{免許状取得者数}])$$

- ・学校教育教員養成課程： $(407 + 2) / 137 = 2.99$

- ・総合教育課程： $(248 + 1) / 108 = 2.31$

単位修得状況

在学中の学習状況について、登録・修得単位数を資料 6 - 1 - 2 - B に示す。上限の 50 単位まで履修登録するのではなく、ややゆとりをもった履修・学習の結果が平均 92.3% の高い単位修得率となっている。なお、4 回生時の登録単位数が他学年に比べて少ないのは、卒業論文に全力を傾けるための計画的な履修計画の現れである。

また、前年度修得単位数が 40 単位以上かつ GPA3.0 以上の者（履修特例措置の適用可能な者）は、例年 7 % 程度で推移している（資料 5 - 1 - 3 - C）。

資料 6 - 1 - 2 - B 平均登録単位数、平均修得単位数調（学部）（平成 20 年度）

	回生	学生数	総登録 単位数	総修得 単位数	平均年度 登録単位数	平均年度 修得単位数
学校教育教員 養成課程	1 回生	215	10,333	9,799	48	45
	2 回生	209	9,987	9,595	47	45
	3 回生	196	8,397	7,643	42	38
	4 回生	159	3,370	2,908	21	18
総合教育課程	1 回生	84	3,932	3,734	46	44
	2 回生	79	3,837	3,640	48	46
	3 回生	82	3,708	3,298	45	40
	4 回生	167	4,755	4,156	28	24

(注)「平均年度登録単位数」と「平均年度修得単位数」は、小数点以下切捨。

(2) 教育学研究科（修士課程）

単位の修得状況

在学中の学習状況について、登録並びに修得単位数を資料 6 - 1 - 2 - C に示す。平均登録単位数は、修了要件の 30 単位と比して 5 ~ 11 単位上回り、また、そのほとんどを修得している。さらに、成績評価の分布を資料

6 - 1 - 2 - Dに示す。

なお、1回生での登録単位数が、学位論文提出要件の15単位を相当上回っており、2回生での登録単位数が6~11と少ない。このことから、1回生で可能な限り知識を吸収し、2回生でその成果を学位論文にまとめ上げるという計画的な履修の現れと言える。

資料 6 - 1 - 2 - C 平均登録単位数、平均修得単位数調（修士課程）（平成 20 年度）

	回生	学生数	総登録 単位数	総修得 単位数	平均年度 登録単位数	平均年度 修得単位数
学校教育専攻	1回生	12	416	410	34	34
	2回生	6	44	35	7	5
教育実践開発専攻	1回生					
	2回生	25	280	259	11	10
教科教育専攻	1回生	43	1,257	1,198	29	27
	2回生	51	326	283	6	5

（注）「平均年度登録単位数」と「平均年度取得単位数」は、小数点以下切捨。

資料 6 - 1 - 2 - D 成績評価分布表（平成 20 年度）

GPA	4.0	3.0以上	2.0以上	1.0以上	1.0未満	合計
分布数	3	76	38	6	14	137
(割合)	(2.2%)	(55.5%)	(27.7%)	(4.4%)	(10.2%)	(100%)

（単位：人）

（注）学部に応じた GPA の暫定値。グレード・ポイント秀=4・優=3・良=2・可=1・不可=0として、次の計算式で算出。

$GPA = [(\text{科目の単位数}) \times (\text{その科目で得たグレード・ポイント})] \text{の総和} / (\text{履修登録した単位数の総和})$

修了時の状況

過去4年間の修了（学位取得）率は、72%~78%を推移している（資料 6 - 1 - 2 - E）。平成 20 年度は、長期履修学生（観点 5 - 5 - 参照）の割合が増えたため、修了率が若干低下した。

また、平成 17 年度入学者について、入学後の状況を資料 6 - 1 - 2 - F に示す。同入学者のうち 83.6%が2年の標準年限で修了しており、3年以内では 89.0%が修了している。

資料 6 - 1 - 2 - E 修了（学位取得）率の推移

年度	学生数(2回生)	修了(学位取得)者数	修了(学位取得)率
平成 17 年度	73	57	78.1%
平成 18 年度	83	65	78.3%
平成 19 年度	84	65	77.4%
平成 20 年度	84	61	72.6%

（注）学生数(2回生)は、各年5月1日現在の人数。

資料 6 - 1 - 2 - F 平成 17 年度入学者における入学後の状況

	人 数	備 考
17 年度入学者	73	
(17-18 年度休学者)	(4)	その後、1 名は 19 年度修了、3 名は 20 年度在籍
17-18 年度退学・除籍者	4	
18 年度修了者(標準年限)	61	
18 年度未修了者(留年)	8	
(19 年度休学者)	(2)	その後、1 名は 19 年度退学、1 名は 20 年度在籍
19 年度退学・除籍者	1	
19 年度修了者(1 年超過)	4	
20 年度退学・除籍者	3	
20 年度修了者(2 年超過)	3	

(注) 休学者数は、内数。

教育職員免許状取得状況

この状況を資料 6 - 1 - 2 - G に示す。修了者の多くが教育職員免許状(専修免許状)を取得している(取得者 1 人当たり平均で 2 つ)。

なお、教員免許未取得の大学院生を対象とした学部授業科目の履修制度による履修状況を資料 6 - 1 - 2 - H に示す。制度として、よく利用されている。

資料 6 - 1 - 2 - G 大学院修了者の教育職員免許状取得者数等

	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度	平成 20 年度
修了者の数	57	65	65	61
免許状取得者数	46	48	43	39
修了者に対する免許状取得者の割合	80.7%	73.8%	66.1%	63.9%
専修免許状総数(延べ数)	110	100	105	97
免許状取得者に対する割合	239.1%	208.3%	244.2%	248.7%
一 種	2	1	0	3
免許状取得者に対する割合	4.3%	2.1%	0%	7.7%

資料 6 - 1 - 2 - H 大学院生の学部授業科目履修状況 (平成 20 年度)

登録者数	総登録 単位数	総修得 単位数	1 人当たり 登録単位数	1 人当たり 修得単位数
33	268	228	8.1	6.9

修士論文

修士論文のうち、学校教育や教科教育など、教育を主題とした内容となっている比率は、資料6-1-2-Iのとおりである。これ以外の主題による修士論文においても、資料1-1-1-C及び資料1-1-2-Bに掲げた教育実践を視野に入れた内容・構成が要件となっている。

資料6-1-2-I 教育を主とした修士論文調べ

	平成 15 年度	平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度	平成 20 年度
修士論文数	75	68	58	65	65	61
うち教育を主とした 修士論文	44 (58.7%)	37 (54.4%)	27 (46.6%)	39 (60.0%)	33 (50.8%)	37 (60.7%)

(3) 教育学研究科（専門職学位課程）

教職大学院における単位修得状況及び成績評価分布は、それぞれ資料6-1-2-J、資料5-11-1-Cのとおりである。なお、教職大学院は平成20年度設置であり、平成21年6月現在学年進行中であることから、修了に関する実績はない。

資料6-1-2-J 平均登録単位数、平均修得単位数調（専門職学位課程）（平成20年度）

回生	学生数	総登録 単位数	総修得 単位数	平均年度 登録単位数	平均年度 修得単位数
1回生	17	523	488	30	28
2回生					

（注）「平均年度登録単位数」と「平均年度取得単位数」は、小数点以下切捨。 長期（3年又は4年）在学コース履修者を除く。

【分析結果とその根拠理由】

学生が身に付ける学力や資質・能力について、学部においては、教育職員免許状の取得状況や単位修得状況などから、修士課程においては、単位の修得状況、修了（学位取得）率、教員職員免許状の取得状況などから、教育の成果や効果が上がっていると判断できる。

観点6-1-1 : 授業評価等、学生からの意見聴取の結果から判断して、教育の成果や効果が上がっているか。

【観点に係る状況】

(1) 教育学部

学生による授業評価アンケート（平成20年度前期・後期の全授業）の各質問項目の結果を資料6-1-3-Aに示す。

教員の授業力についての諸項目はいずれも80%を超えており、非常に良好な結果である。特に授業に対する準備（Q11）、熱意（Q13）などは90%以上に達している。

授業のレベル(Q14)については、半数以上が適切であると回答している。Q15(授業から新しい知識や考え方を得たか)やQ16(授業の満足度)Q17(授業から新たな教育実践の知見を得たか)などがいずれも高い数値での肯定的な結果を示している。

また、平成20年度後期授業における学生の自己評価に関するアンケート調査の結果を資料6-1-3-Bに示す。全科目の合計で91%が、ある程度以上の達成度を示している。

平成20年度卒業生を対象に実施したアンケート(資料6-1-3-C)でも、卒業時までには獲得すべき資質能力(達成目標)への自己評価について、9つの設問全てについて70%以上(平均で77%)が、ある程度以上達成できたと回答している。

資料6-1-3-A 学生による授業評価アンケート(全授業)における各項目の回答 選択肢1と2(肯定的な回答)の割合(%)

質問項目	20年度 前期	20年度 後期
Q3 この授業の欠席数はどの程度でしたか？ [「0回」または「1~2回」と回答した%]	88.9	89.6
Q4 出席状況や受講姿勢から考えて、この授業を公正に評価する資格が、あなたにあると思いますか？	94.01	93.9
Q5 この授業に自主的かつ意欲的に取り組みましたか？	91.0	90.4
Q6 授業計画(シラバス)を読んで授業の全体像を把握して授業に臨みましたか？	64.5	66.0
Q7 この授業一回のために、授業外で予習・復習・課題などに平均してどの位の時間を費やしましたか？ [「2時間以上」または「1~2時間」と回答した%]	29.0	32.1
Q8 毎回の授業ごとに、その日の学習計画や目標が明確に示されたと思いますか？	86.9	89.8
Q9 この授業は、私語等で乱されることなく、集中して受講できる雰囲気だったと思いましたか？	87.0	86.6
Q10 この授業における担当教員の話し方は明瞭でわかりやすかったと思いますか？	87.5	88.8
Q11 この授業はよく準備された授業と感じましたか？	92.6	93.0
Q12 担当教員は学生の理解や反応を受け止めながら授業を進めていたと思いますか？	84.8	87.3
Q13 この授業に対する担当教員の熱意を感じましたか？	92.6	94.3
Q14 あなたにとってこの授業のレベルは適切でしたか？ [「適当」と回答した%]	42.9	44.2
Q15 この授業から新しい知識や考え方を得ることができたと思いますか？	92.1	93.5
Q16 あなたはこの授業にどの程度満足しましたか？	90.3	91.8
Q17 この授業から教育実践の新たな知見を得ることができましたか？	90.4	90.6

(備考) 学生の回答率(提出学生数/全登録学生数):

[20年度前期] 8,835 / 11,815 = 74.8% [20年度後期] 7,189 / 9,886 = 72.7%

資料6-1-3-B 平成20年度後期授業における学生の自己評価に関するアンケート調査結果

・この授業を受講して、あなた自身は、シラバスに記載されている授業の科目をどの程度達成できたと思いますか。

1. 達成した 2. ほぼ達成した 3. やや達成できた
4. ほとんど達成できなかった 5. まったく達成できなかった

[回答集計結果]

1. 16.4% 2. 39.8% 3. 35.0%
4. 5.2% 5. 0.9% 未回答: 2.7%

資料6 - 1 - 3 - C 平成 20 年度卒業生アンケート

設問等		学部合計		
		卒業生数		264
		回答者数		221 (84%)
		摘要	%	人数・件数
卒業時までには獲得すべき資質能力(達成目標)への自己評価	Q 8 - 2 A .教育の目的・歴史,人権,さらには教育や学校に関する法令などを理解し 現代的な教育課題を把握できる。	5 満たしている	5%	10
		4 ほぼ満たしている	31%	68
		3 一部満たしている	43%	95
		2 かなり満たしていない	7%	15
		1 まったく満たしていない	1%	3
	B .小学校,中学校の教科内容とその系統性を理解し,教育実践に活用することができる。	5 満たしている	9%	19
		4 ほぼ満たしている	34%	76
		3 一部満たしている	34%	76
		2 かなり満たしていない	8%	17
		1 まったく満たしていない	1%	3
	C .主な情報機器を利用し,獲得した情報を教育活動に具体化できる。	5 満たしている	10%	23
		4 ほぼ満たしている	42%	92
		3 一部満たしている	26%	58
		2 かなり満たしていない	7%	16
		1 まったく満たしていない	1%	2
	D .学習指導計画立案に関する基本的事項を理解し,児童・生徒の発達段階に応じて作成することができる。	5 満たしている	11%	24
		4 ほぼ満たしている	40%	89
		3 一部満たしている	29%	63
		2 かなり満たしていない	7%	16
		1 まったく満たしていない	1%	3
	E .多様な指導方法を理解し,児童・生徒の発達段階に応じた指導をすることができる。	5 満たしている	9%	20
		4 ほぼ満たしている	33%	74
		3 一部満たしている	35%	78
		2 かなり満たしていない	8%	17
		1 まったく満たしていない	1%	2
	F .多様な評価方法を理解し,児童・生徒の発達段階に応じて用いることができる。	5 満たしている	6%	13
		4 ほぼ満たしている	34%	75
		3 一部満たしている	32%	71
2 かなり満たしていない		12%	26	
1 まったく満たしていない		3%	6	
G .児童・生徒の身体的・認知的・情意的発育・発達に関する基礎的内容を理解し 教育実践に具	5 満たしている	7%	15	
	4 ほぼ満たしている	29%	64	

	体化できる。	3 一部満たしている	42%	92
		2 かなり満たしていない	8%	18
		1 まったく満たしていない	1%	2
	H.学校の組織的な教育活動や経営活動,地域の教育活動などに関わることの重要性を理解し,教育活動に生かすことができる。	5 満たしている	9%	19
		4 ほぼ満たしている	27%	59
		3 一部満たしている	41%	90
		2 かなり満たしていない	9%	19
		1 まったく満たしていない	2%	4
	I.教師の仕事や役割,責任を自覚した上で,教師として自己成長する意味とその方法を理解し,自ら実践することができる。	5 満たしている	13%	28
		4 ほぼ満たしている	43%	96
		3 一部満たしている	26%	58
		2 かなり満たしていない	4%	8
1 まったく満たしていない		0%	1	

(2) 教育学研究科(修士課程)

平成16年度に、過去5年間の既修了生を対象として、アンケート調査を実施した。a.授業内容、b.カリキュラム、c.その他(教授陣、履修指導、施設・設備等)の3つの項目での満足度調査であった。

a.では、「専門知識の習得・教育における現代的課題の分析と対応」が84%の高率で回答された。b.では、「目標に沿っての授業選択できるカリキュラム」が52.1%であった。c.では、「教授陣の充実」が79.7%で回答された。b.の回答率がやや低いのは、夜間コースへの現職教員の修士の履修上及び時間的制約の影響があると考えられる。それでも、少人数教育での演習形式による丁寧な指導が多くの自由記述回答で挙げられている。

また、平成20年度修了生を対象に実施したアンケート(資料6-1-3-D)でも、獲得すべき資質能力(達成目標)への自己評価について、9つの設問全てについて60%以上(平均で73%)が、伸ばすことができたと回答している。

資料6-1-3-D 平成20年度修了生アンケート

設問等		大学院合計	
		専攻毎の修了者数	61
		専攻毎の回答者数	32(53%)
		摘要	% 人数・件数
Q2-2 大学院在学中に次の資質能力(達成目標)をどの程度伸ばすことができるか	教育の目的・歴史,人権,さらには教育や学校に関する法令などを理解し,現代的な教育課題を把握できる。	5 とても伸ばせた	16% 5
		4 かなり伸ばせた	13% 4
		3 少し伸ばせた	47% 15
		2 あまり伸ばせていない	16% 5
		1 まったく伸ばせていない	0% 0
	小学校,中学校の教科内容とその系統性を理解し,教育実践に活用することができる。	5 とても伸ばせた	13% 4
		4 かなり伸ばせた	28% 9
		3 少し伸ばせた	28% 9

	2 あまり伸ばせていない	16%	5
	1 まったく伸ばせていない	6%	2
主な情報機器を利用し、獲得した情報を教育活動に具体化できる。	5 とても伸ばせた	13%	4
	4 かなり伸ばせた	28%	9
	3 少し伸ばせた	44%	14
	2 あまり伸ばせていない	3%	1
	1 まったく伸ばせていない	3%	1
学習指導計画立案に関する基本的事項を理解し、児童・生徒の発達段階に応じて作成することができる。	5 とても伸ばせた	13%	4
	4 かなり伸ばせた	28%	9
	3 少し伸ばせた	22%	7
	2 あまり伸ばせていない	25%	8
	1 まったく伸ばせていない	3%	1
多様な指導方法を理解し、児童・生徒の発達段階に応じた指導をすることができる。	5 とても伸ばせた	19%	6
	4 かなり伸ばせた	25%	8
	3 少し伸ばせた	34%	11
	2 あまり伸ばせていない	13%	4
	1 まったく伸ばせていない	0%	0
多様な評価方法を理解し、児童・生徒の発達段階に応じて用いることができる。	5 とても伸ばせた	19%	6
	4 かなり伸ばせた	25%	8
	3 少し伸ばせた	22%	7
	2 あまり伸ばせていない	25%	8
	1 まったく伸ばせていない	0%	0
児童・生徒の身体的・認知的・情意的発達に関する基礎的内容を理解し、教育実践に具体化できる。	5 とても伸ばせた	16%	5
	4 かなり伸ばせた	28%	9
	3 少し伸ばせた	31%	10
	2 あまり伸ばせていない	13%	4
	1 まったく伸ばせていない	3%	1
学校の組織的な教育活動や経営活動、地域の教育活動などに関わることの重要性を理解し、教育活動に生かすことができる。	5 とても伸ばせた	16%	5
	4 かなり伸ばせた	28%	9
	3 少し伸ばせた	25%	8
	2 あまり伸ばせていない	19%	6
	1 まったく伸ばせていない	3%	1
教師の仕事や役割、責任を自覚した上で、教師として自己成長する意味とその方法を理解し、自ら実践することができる。	5 とても伸ばせた	31%	10
	4 かなり伸ばせた	25%	8
	3 少し伸ばせた	25%	8
	2 あまり伸ばせていない	6%	2
	1 まったく伸ばせていない	3%	1

(3) 教育学研究科(専門職学位課程)

専門職学位課程における院生による授業評価アンケート(平成20年度前期)の各質問項目の結果を資料6-1-3-Eに示す。

教員の授業力についての諸項目はいずれも90%を超えており、非常に良好な結果である。特に授業における担当教員の話し方(Q9)、熱意(Q12)などは100%に達している。

授業のレベル(Q13)については、半数以上が適切であると回答している。Q14(授業から新しい知識や考え方を得たか)やQ15(授業の満足度)、Q17(授業から新たな教育実践の知見を得たか)などが非常に高い数値での肯定的な結果を示している。

**資料6-1-3-E 教職大学院院生による授業評価アンケートにおける各項目の回答
選択肢1と2(肯定的な回答)の割合(%)**

質問項目	20年度前期
Q5 この授業に関連する文献を自分から読んで学習するなど、積極的に取り組みましたか?	90.6
Q6 授業の全体像を把握するのに授業計画(シラバス)は役に立ちましたか?	90.6
Q7 毎回の授業ごとに、その日の学習計画や目標が明確に示されたと思いますか?	97.4
Q8 この授業はよく準備された授業と感じましたか?	98.3
Q9 この授業における担当教員の話し方は明瞭でわかりやすかったと思いますか?	100
Q10 この授業は質問や発言をしやすい雰囲気でしたか?	94.9
Q11 この授業は体系的でよくまとまっていたと思いますか?	99.1
Q12 この授業に対する担当教員の熱意を感じましたか?	100
Q13 あなたにとってこの授業のレベルは適切でしたか? [「適当」と回答した%]	66.4
Q14 この授業から新しい知識や考え方を得ることができたと思いますか?	99.1
Q15 あなたはこの授業にどの程度満足しましたか?	99.1
Q16 この授業から教育実践の新たな知見を得ることができましたか?	100

(備考) 院生の回答率(提出学生数/全登録学生数): 117/126 = 92.9%

【分析結果とその根拠理由】

教育学部における学業の成果に関する学生の評価については、授業評価アンケートに見られるように、教員の授業力や授業内容についての諸項目・新たな知見の獲得・満足度が、いずれも80%を超える高い水準である。修士課程修了生アンケート調査の結果から、指導力のあるスタッフからの専門知識の付与や現代の教育課題の据え方・対応の方法論等で充実した教育が展開されていることが分かる。教職大学院でも、授業評価アンケートの結果から、教育の成果が院生から評価されていることが分かる。

以上の学生からの意見聴取の結果から、教育の成果や効果が上がっていると判断できる。

観点6-1- : 教育の目的で意図している養成しようとする人材像等について、就職や進学といった卒業(修了)後の進路の状況等の実績や成果について定量的な面も含めて判断して、教育の成果や効果が上がっているか。

【観点到に係る状況】

(1) 教育学部

2つの課程について、卒業生を送り出した平成14年度からの就職状況を分析した。

）学校教育教員養成課程

教員採用については、以前は10%前後であった教員(正規)の就職状況が、14年度以降についてはほぼ右肩上がりで推移している(資料6-1-4-A)、臨時採用を合わせた教員就職率は、最近4年間で平均62.0%である。

校種別で見ると、小学校への就職者数が多い(資料6-1-4-B、6-1-4-C)

なお教員採用試験受験率及び合格率は、年々上昇傾向にある(資料6-1-4-D)

資料6-1-4-A 学校教育教員養成課程における進路状況

卒業年度	就 職 者					進学者	その他	就職者数 [就職率] (注)
	教 員			企業	公務員			
	正規	臨時	計					
平成14年度	31 (20.8)	48 (32.2)	79 (53.0)	27 (18.1)	3 (2.0)	26 (17.5)	14 (9.4)	109 [88.6]
平成15年度	38 (27.7)	42 (30.7)	80 (58.4)	18 (13.1)	2 (1.5)	28 (20.4)	9 (6.6)	100 [91.7]
平成16年度	46 (31.7)	49 (33.8)	95 (65.5)	12 (8.3)	3 (2.1)	28 (19.3)	7 (4.8)	110 [94.0]
平成17年度	32 (21.2)	55 (36.4)	87 (57.6)	20 (13.2)	3 (2.0)	30 (19.9)	11 (7.3)	110 [90.9]
平成18年度	54 (38.6)	35 (25.0)	89 (63.6)	15 (10.7)	3 (2.1)	24 (17.1)	9 (6.4)	107 [92.2]
平成19年度	59 (43.4)	32 (23.5)	91 (66.9)	20 (14.7)	3 (2.2)	15 (11.0)	7 (5.1)	114 [94.2]
平成20年度	49 (35.8)	33 (24.1)	82 (59.9)	17 (12.4)	9 (6.6)	21 (15.3)	8 (5.8)	108 [93.1]

(単位：人。 また、カッコ内は、卒業者に占める割合(%。))

(注) [就職率]は、卒業者数から進学者数を除いて算出した。

【出典：『大学概要』2002-2009】

資料6-1-4-B 学校教育教員養成課程における教員就職者の校種別内訳 (正 規)

卒業年度	小学校	小学校の 割合	中学校	高等学校	特殊 諸学校	幼稚園	計
平成14年度	21	67.7%	4	0	0	6	31
平成15年度	28	73.7%	0	1	1	8	38
平成16年度	33	71.7%	7	0	0	6	46
平成17年度	24	75.0%	5	0	0	3	32
平成18年度	39	72.2%	5	0	3	7	54
平成19年度	41	69.5%	13	1	0	4	59
平成20年度	34	69.4%	4	1	6	4	49

【出典：『大学概要』2002-2009】

(単位：人)

資料 6 - 1 - 4 - C 学校教育教員養成課程における教員就職者の校種別内訳 (臨時)

卒業年度	小学校	小学校の割合	中学校	高等学校	特殊諸学校	幼稚園	計
平成 14 年度	35	72.9%	8	1	1	3	48
平成 15 年度	33	78.6%	3	2	0	4	42
平成 16 年度	32	65.3%	9	1	4	3	49
平成 17 年度	29	52.7%	12	6	4	4	55
平成 18 年度	25	71.4%	5	0	4	1	35
平成 19 年度	23	71.9%	4	2	3	0	32
平成 20 年度	22	64.7%	7	1	2	2	34

【出典：『大学概要』2002-2009】

(単位：人)

資料 6 - 1 - 4 - D 学校教育教員養成課程における教員採用試験受験状況

年 度	卒業者数	受験者数	受験率	合格者数	合格率
平成 16 年度	145	89	61.4%	46	51.7%
平成 17 年度	151	102	67.5%	32	31.4%
平成 18 年度	140	109	77.9%	54	49.5%
平成 19 年度	136	102	75.0%	59	57.8%
平成 20 年度	136	94	69.1%	52	55.3%

) 総合教育課程

企業、教員を中心として就職率が上昇している(資料 6 - 1 - 4 - E)。今後の中学校、高校の採用数の増加によって、教員希望者はさらに増える可能性がある。

資料 6 - 1 - 4 - E 総合教育課程における進路状況

卒業年度	就 職 者					進学者	その他	就職者数 [就職率] (注)
	教 員			企業	公務員			
	正規	臨時	計					
平成 14 年度	0 (0.0)	17 (14.7)	17 (14.7)	36 (31.0)	4 (3.5)	39 (33.6)	20 (17.2)	57 [74.0]
平成 15 年度	5 (3.9)	24 (18.9)	29 (22.8)	50 (39.4)	3 (2.4)	25 (19.7)	20 (15.7)	82 [80.4]
平成 16 年度	9 (6.2)	22 (15.1)	31 (21.3)	49 (33.5)	3 (2.0)	35 (24.0)	30 (19.2)	83 [81.5]
平成 17 年度	4 (3.2)	22 (17.5)	26 (20.6)	51 (40.5)	4 (3.2)	23 (18.3)	22 (17.5)	81 [78.6]
平成 18 年度	11 (8.5)	22 (17.1)	33 (25.6)	51 (39.5)	7 (5.4)	24 (18.6)	14 (10.9)	91 [86.7]
平成 19 年度	11 (8.2)	25 (18.7)	36 (26.9)	47 (35.1)	5 (3.7)	31 (23.1)	15 (11.2)	88 [85.4]
平成 20 年度	17 (12.8)	21 (15.8)	38 (28.6)	49 (36.8)	3 (2.3)	30 (22.5)	13 (9.8)	90 [87.4]

(単位：人。 また、カッコ内は、卒業者に占める割合(%))。

(注) [就職率]は、卒業者数から進学者数を除いて算出した。

【出典：『大学概要』2002-2009】

(2) 教育学研究科（修士課程）

過去4年間の就職状況を見ると、修了者のうち48～63%が教員の職に就いている（資料6-1-4-F）

資料6-1-4-F 大学院における進路状況

修了年度	就 職 者					進学者	その他	就職者数 [就職率] (注)
	教 員			企業	公務員			
	正規	臨時	計					
平成16年度	21 (30.9)	22 (32.3)	43 (63.2)	10 (14.7)	3 (4.4)	4 (5.9)	8 (11.8)	56 [87.5]
平成17年度	15 (26.3)	21 (36.8)	36 (63.1)	5 (8.8)	0 (0.0)	10 (17.6)	6 (10.5)	41 [87.2]
平成18年度	13 (20.0)	21 (32.3)	34 (52.3)	13 (20.0)	1 (1.5)	4 (6.2)	13 (20.0)	48 [78.7]
平成19年度	15 (23.1)	22 (33.8)	37 (56.9)	9 (13.8)	3 (4.6)	5 (7.7)	11 (16.9)	49 [81.7]
平成20年度	13 (21.3)	16 (26.2)	29 (47.5)	5 (8.2)	3 (4.9)	12 (19.7)	12 (19.7)	37 [75.5]

(注) [就職率]は、修了者数から進学者数を除いて算出した。(単位：人。また、小カッコ内は、修了者に占める割合(%。))

【出典：『大学概要』2004-2009】

(3) 教育学研究科（専門職学位課程）

平成20年度設置であり、平成21年6月現在学年進行中であることから、進路に関する実績はない(下記の観点6-1-も同様)。

【分析結果とその根拠理由】

教育学部学校教育教員養成課程における教員就職状況は、中期的に見ると上昇傾向にあり、正規教員採用比率も上昇している。また、総合教育課程では、教員・企業を含めた全体的な就職状況を見ると、上昇傾向にある。

大学院修了者のうち教員に就職した者は48～63%であるが、他大学の博士課程への進学が6～20%あることを考えると、教員就職率は非常に高いと言える。

以上のことから、卒業・修了後の進路の状況等から見た教育の成果や効果が上がっていると判断できる。

観点6-1- : 卒業(修了)生や、就職先等の関係者からの意見聴取の結果から判断して、教育の成果や効果が上がっているか。

【観点到る状況】

(1) 教育学部

卒業生が勤務している奈良県下の学校を対象に、卒業生の勤務先アンケート調査を平成18年度に実施し、回答を分析した結果、学校関係者から学校教員として比較的高い評価を得ていることが分かった(資料6-1-5-A)。

資料 6 - 1 - 5 - A 『奈良教育大学の教育に関するアンケート結果報告書』抜粋

・奈良教育大学の卒業生に求めること [抜粋]

卒業生の資質・能力

- ・奈良教育大学の卒業生の印象として、「教科専門と教科内容の関係を理解し実践できていた」という回答が最も多かった。

教育実習生や卒業生における奈良教育大学の教育の成果・効果

- ・「教科に関する学術的知識を備えている」、「教師の役割を自覚している」という点については評価が高く、約 6 割の回答者が「あてはまる」と回答している。「子供の発達に関する基礎知識を備えている」、「幅広い教養と専門的知識・技能を習得している」という点についても、過半数が「あてはまる」と回答している。

(備考) 調査票配付対象：奈良県下の幼稚園、小学校、中学校、高等学校、養護学校

配付数：628、回収数：260、回収率：41.4%

調査内容：・社会から見た本学の教育活動の現状把握
 ・大学の一般的な教育活動の認知度
 ・教育理念・目標の印象
 ・教員に求められる資質能力
 ・大学に期待する教育活動 など

【出典：『奈良教育大学の教育に関するアンケート結果報告書』平成 19 年 2 月、p4 より抜粋】

(2) 教育学研究科 (修士課程)

奈良県下の小学校及び中学校の管理職 (校長、教頭) を対象として、平成 19 年度にアンケート調査を実施した (資料 6 - 1 - 5 - B)。資料 6 - 1 - 5 - C には、本学修士課程修了者に対し、教育成果が現れている事項が挙げられている。

資料 6 - 1 - 5 - B 「奈良教育大学大学院に関するアンケート調査」の概要

(1) 調査時期

平成 20 年 1 月

(2) 調査対象

奈良県内の小学校・中学校・特別支援学校の学校長

(3) 調査方法

郵送による

(4) 回答数等

小学校：117 (227 校配付、回収率 51.5%)

中学校：70 (120 校配付、回収率 58.3%)

校種無回答：2

(5) 調査項目

・奈良教育大学の大学院 (修士課程) について

Q1 本学大学院の印象、 Q2 理念、目的等、 Q3 特色ある教育

・現職教員の研修・指導力向上と大学院教育について

Q4 現職教員が大学、大学院で学ぶ機会の必要性

Q5 再教育内容、現職教員が学べる環境

・奈良教育大学修士課程の卒業生に求めること

Q6 修了生の勤務の有無、 Q7 修了生の資質、能力、 Q8 学習・研究成果の還元

Q9 教育実習生等としての受入の有無、 Q10 教育の成果・効果

Q11 大学で学んでおくべきこと、経験しておくべきこと

・奈良教育大学に期待されること

Q12 本学への期待・改善点等

資料6 - 1 - 5 - C 奈良教育大学大学院に関するアンケート結果 (Q10)

Q10 本学修士課程修了の教員(修士課程の教育実習生を含む)と接されたご経験上、奈良教育大学における教育の成果・効果はどのような部分に現れていたと思われますか。あてはまる番号に をしてください。

設問	中学校		小学校	
		×		×
1) 教師の役割を自覚し、責任をもって教育にあたる	25	4	47	1
2) 子供の発達と学習に関する基礎知識と理解力を備えている	19	3	46	1
3) 教科に関する学術的知識と理解力を備えている	37	0	44	1
4) 幅広い教養と基礎的な専門的知識・技能を習得している	34	2	41	3
5) 子供の学ぶ意欲を高める方法を学んでいる	22	2	41	2
6) わかる授業の実施、適切な生徒指導ができる	22	4	36	3
7) カリキュラム編成の基礎知識を修得している	22	4	31	3
8) 教育の理念と実践が統合された専門的能力を有している	23	2	30	2
9) 学級経営に関する知識、方法を修得している	13	5	25	5
10) 社会の多様な変化に対応した学際的分野で専門知識を身につけ、積極的に活躍する	12	4	19	4
11) その他(自由記述欄) ・わかる授業の創造をめざして自己研究を続け、指導的立場で活躍してくれている。 ・専門に偏るのではなくオールラウンド的な能力を備えている。				

【分析結果とその根拠理由】

学部卒業生の勤務先アンケート調査結果を見ると、本学卒業生は、学校関係者から学校教員として比較的高い評価を得ている。また、大学院修了者が採用されている小学校・中学校の校長へのアンケート調査によれば、子どもの学習意欲喚起やわかる授業の創造における指導的役割等について、高い評価を得ており、高度専門職業人養成の成果の裏付けと言える。

以上のことから、卒業(修了)生や、就職先等の関係者からの意見聴取の結果から、教育の成果や効果が上がっていると判断できる。

(2) 優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

- ・ カリキュラム・フレームワークの構築である。これは、バランスのよいカリキュラム編成、学生が獲得すべき資質能力目標基準の設定を通して、大学の教育活動の説明責任を果たす取り組みである。今後、学校教育教員養成課程だけではなく、総合教育課程でも作成する予定である。
- ・ 単位修得状況、教育職員免許状の取得状況、授業評価等による満足度等の高さ、教員就職者の増加傾向などの指標に明らかのように、教育の成果は着実に上がっていると見える。
- ・ 卒業生・修了者の勤務先からの意見聴取から、教育の成果や効果が十分にあがっていると判断できる。

【改善を要する点】

- ・ 単位認定に関わる評価の適正化について今後さらに検討する必要がある。この点は、カリキュラム・フレームワークの構築の取り組みと合わせて展開されるべき課題でもある。

(3) 基準 6 の自己評価の概要

学生が身に付ける学力、資質・能力や養成しようとする人材像等をアドミッション・ポリシー等で明らかにし、その達成状況を検証・評価するための適切な取組として、カリキュラム・フレームワークの構築が行われている。

授業評価の実施に加えて、修了生アンケート、授業における学生の自己評価に関するアンケートなどで学生の満足度・達成度の把握に努めており、その結果、全般的に学生の満足度・達成度は高いことが示されている。

近畿圏を中心に広域に人材を輩出し、また、教員就職状況も増加傾向にある。教育の成果は着実に上がっているが、今後の教員需要が増加傾向にあることにも鑑み、さらなる成果が求められる。

本学の主な目的である教員養成という観点から、教員就職状況は、学校教育教員養成課程では中期的に見ると上昇傾向にあり、正規教員採用比率も上昇しており、大学院においても高い水準である。また、総合教育課程では、教員・企業を含めた全体的な就職状況を見ると、上昇傾向にある。

卒業生・大学院修了者の勤務先アンケート調査結果から、学部及び大学院いずれの教育においても高い評価を得ており、その成果や効果があがっていると言える。

